

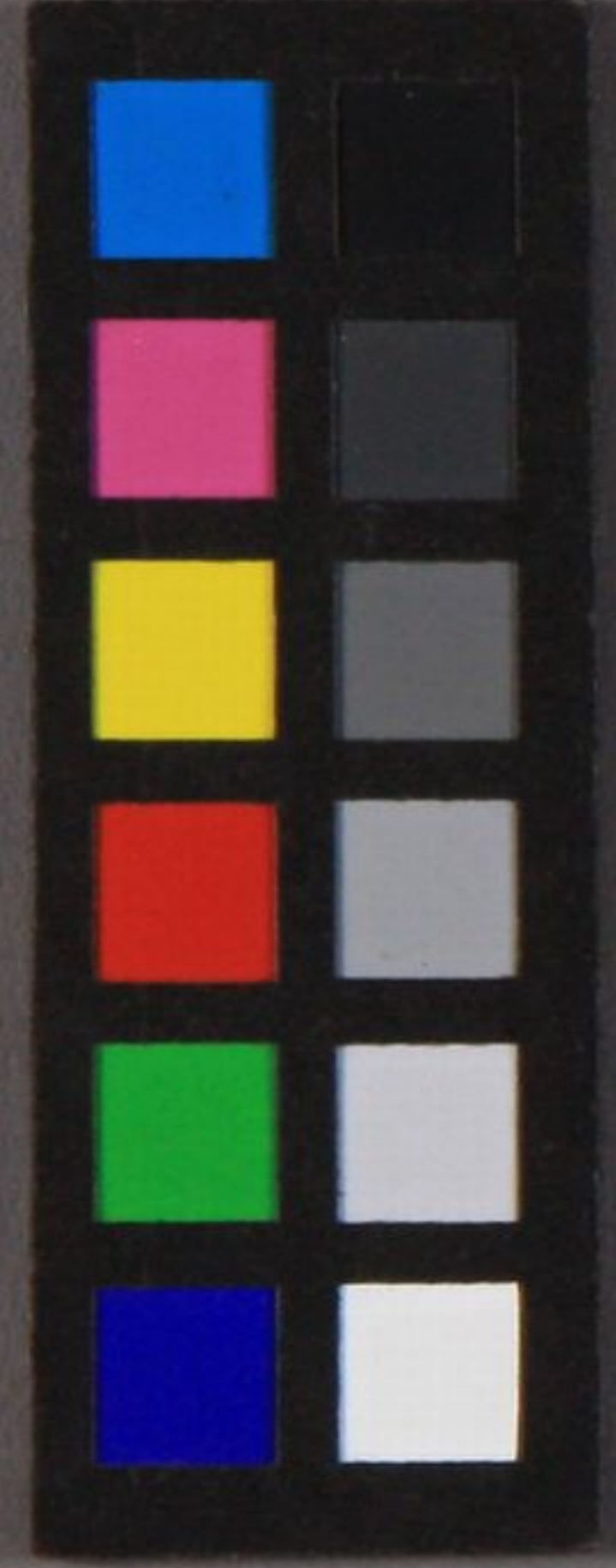
悲しき玩具具

石川啄木著



東雲堂發行
大正元年

【再
版】



悲しき玩具

石川啄木著





悲しき玩具具

石川啄木著

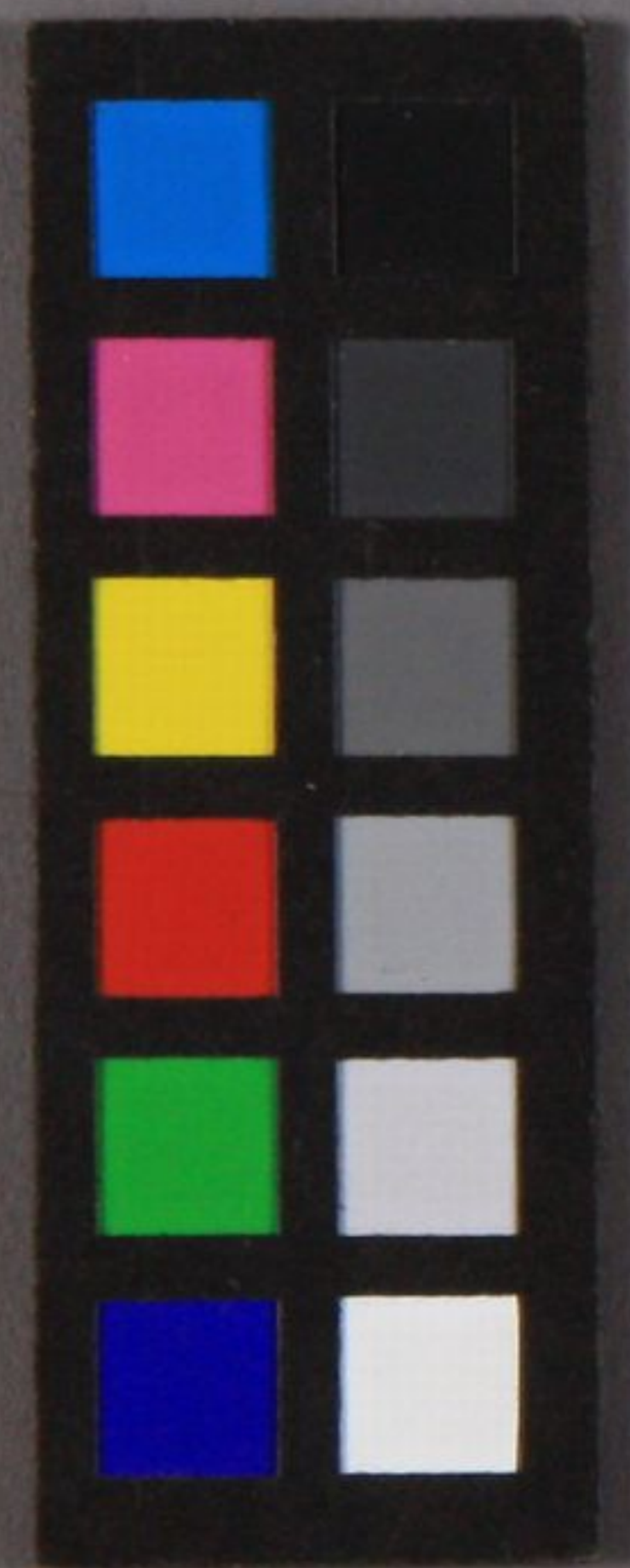


【再
版】

東雲堂發行
大正元年

悲しき玩具具
石川啄木著



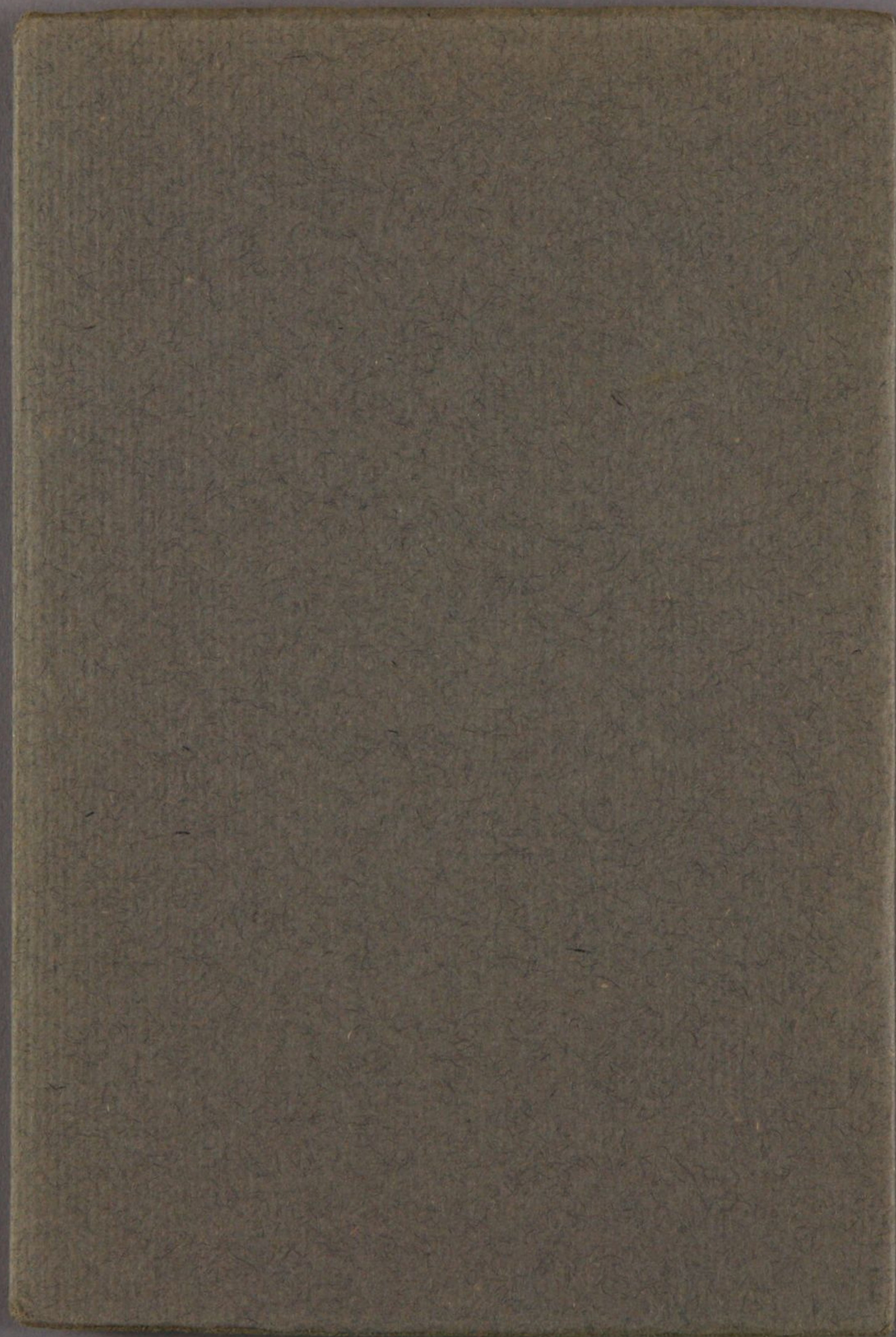


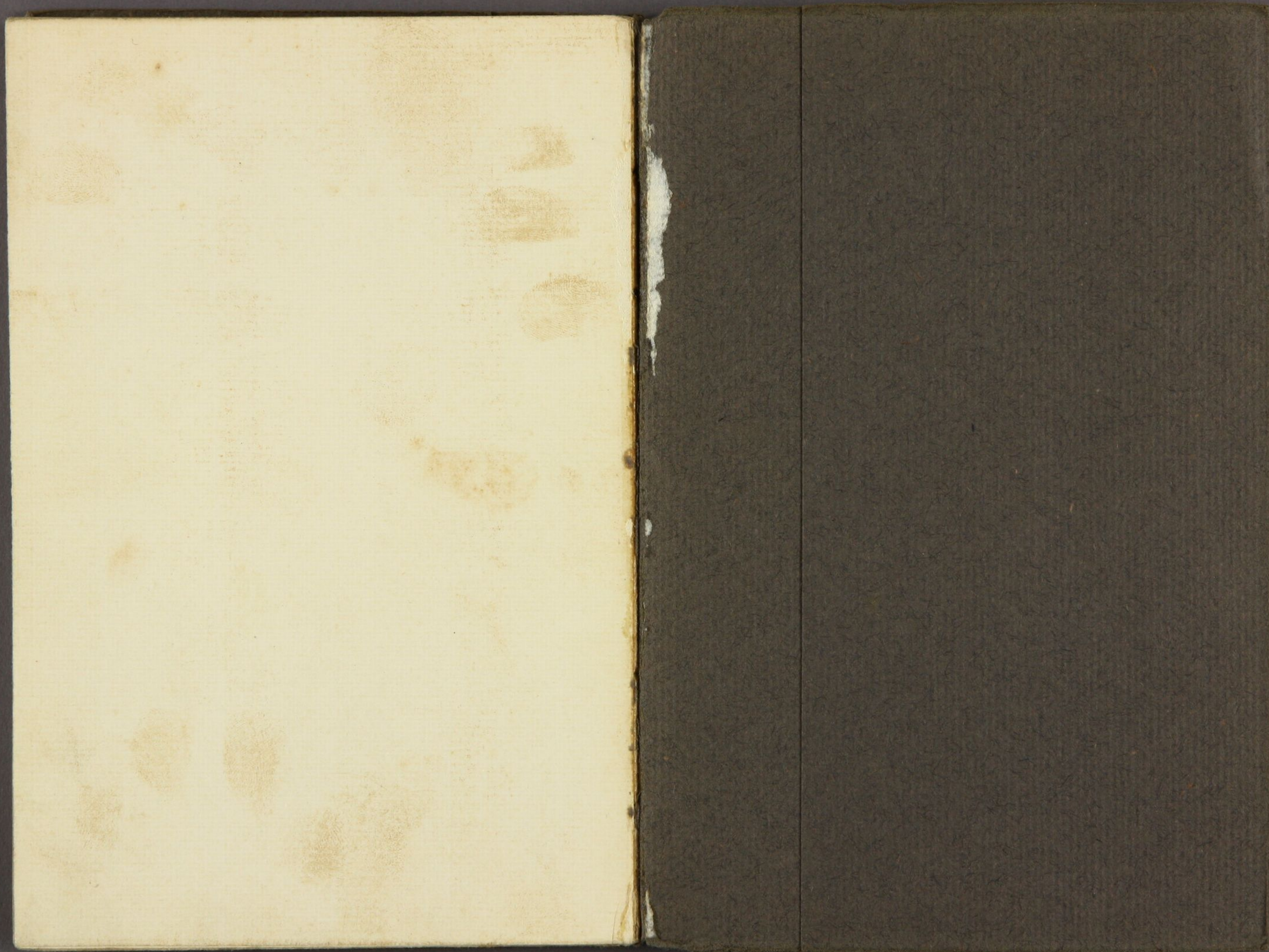
具玩きし悲

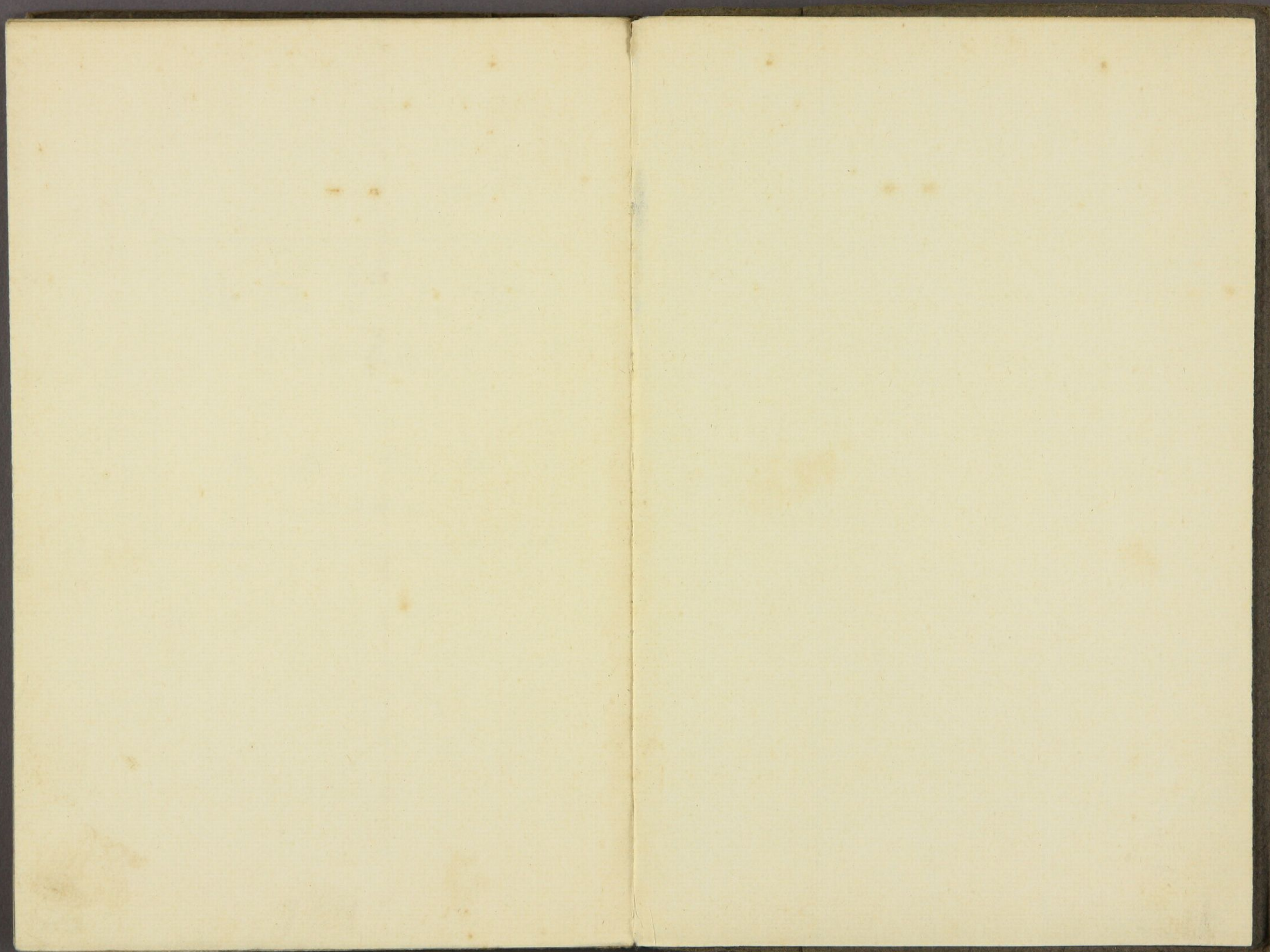
★

木 啄 川 石











悲しき玩具具

〔一握の砂以後〕

*

石川啄木

(四十三一年一月末よ)

内 容

一握の砂以後百九十四首 (歌)

一利己主義者と友人との對話 (感想)

歌のいろく (感想)

悲しき玩具

— 握の砂以後 —

呼吸すれば、
胸の中にて鳴る音あり。
風よりもさびしきその音！

*

眼閉づれど、
心にうかぶ何もなし。
さびしくも、また、眼をあけるかな。

途中にてふと気が變り、
つとめ先を休みて、今日も、
河岸をさまよへり。

*

咽喉がかわき、
まだ起きてゐる果物屋を探しに行きぬ。
秋の夜ふけに。

遊びに出で子供かへらず、
取り出して
走らせて見る玩具の機關車。

*

本を買ひたし、本を買ひたしと、
あてつけのつもりではなけれど、
妻に言ひてみる。

(4)

旅を思ふ夫の心！
叱り泣く、妻子の心！
朝の食卓！

*

家を出て五町ばかりは、
用のある人のごとくに
歩いてみたれど――！

(5)

痛む齒をおさへつつ、
日が赤赤と、
冬の靄の中にのぼるを見たり。

*

いつまでも歩いてゐねばならぬごとき
思ひ湧き來ぬ、
深夜の町町。

なつかしき冬の朝かな。
湯をのめば、
湯氣がやはらかに、顔にかかれり。

*

何となく、
今朝は少しく、わが心明るきごとし。
手の爪を切る。

うつと
本の挿繪に眺め入り、
煙草の煙吹きかけてみる。

*

途中にて乗換の電車なくなりしに、
泣かうかと思ひき。
雨も降りてゐき。

二晩おきに、
夜の一時頃に切通の坂を上りしも――
勤めなればかな。

*

しつとりと
酒のかわりにひたりたる
脳の重みを感じて歸る。

今日もまた酒のめるかな！
酒のめば
胸のむかつく癖を知りつつ。

*

何事か今我つぶやけり。
かく思ひ、
目をうちつぶり、酔ひを味ふ。

すつきりと酔ひのさめたる心地よさよ！
夜中に起きて、
墨を磨るかな。

*

真夜中の出窓に出でて、
欄干の霜に
手先を冷やしけるかな。

どうなりと勝手になれといふごとき
わがこのごろを
ひとり恐るる。

*

手も足もはなればなれにあるごとき
ものうき寢覚！
かなしき寢覚！

朝な朝な
撫でてかなしむ、
下にして寝た方の腿のかるきしびれを。

*

曠野ゆく汽車のごとくに、
このなやみ、
ときどき我の心を通る。

みすぼらしき郷里の新聞ひろげつつ、
誤植ひろへり。
今朝のかなしみ。

*

誰か我を
思ふ存分叱りつくる人あれと思ふ。
何の心ぞ。

何がなく
初恋人のおくつきに詣づることし。
郊外に来ぬ。

*

なつかしき
故郷にかへる思ひあり、
久し振りにて汽車に乗りしに。

新しき明日の來るを信ずといふ
自分の言葉に
嘘はなけれど――

*

考へれば、
ほんとに欲しと思ふこと有るやうで無し。
煙管をみがく。

今日ひよいと山が戀しくて
山に來ぬ。
去年腰掛けし石をさがすかな。

*

朝寝して新聞讀む間なかりしを
負債のどく
今日も感ずる。

よごれたる手をみる――
ちようど
この頃の自分の心に對ふがごとし。

*

よごれたる手を洗ひし時の
かすかなる満足が
今日の満足なりき。

年明けてゆるめる心！
うつとりと
來し方をすべて忘れしごとし。

*

昨日まで朝から晩まで張りつめし
あのころもち
忘れじと思へど。

戸の面には羽子突く音す。
笑ふ聲す。
去年の正月にかへれるごとし。

*

何となく、
今年はい事あるごとし。
元日の朝、晴れて風無し。

腹の底より欠伸もよほし
ながながと欠伸してみぬ、
今年の元日。

*

いつの年も、
似たよな歌を二つ三つ
年賀の文に書いてよこす友。

正月しやうげつの四よ目めになりて
あの人ひとの
年ねんに一度いちどの葉書はがきも來きにけり。

*

世よにおこなひがたき事ことのみ考かんがへる
われわれの頭あたまよ！
今年ことしもしかるか。

人ひとがみな
同じ方角ほうかくに向むいて行く。
それを横よこより見みてゐる心こころ。

*

いつまでか、
この見飽あきたる懸額かけがくを
このまま懸かけておくことやらむ。

ちりちりと、
蠟燭の燃えつくるごとく、
夜となりたる大晦日かな。

*

青塗の瀬戸の火鉢によりかかり、
眼閉ぢ、眼を開け、
時を惜めり。

何となく明日はよき事あるごとく
思ふ心を
叱りて眠る。

*

過ぎゆける一年のつかれ出しものか、
元日といふに
うとうと眠し。

それどなく
その由るところ悲しまる、
元日の午後の眠たき心。

*

ちつとして、
蜜柑のつゆに染まりたる瓜を見つむる
心もどなさ！

手を打ちて
眠氣の返事きくまでの
そのもどかしさに似たるもどかしさ！

*

やみがたき用を忘れ來ぬ
途中にて口に入れたる
ゼムのためなりし。

すつばりと蒲團をかぶり、
足をちいめ、
舌を出してみぬ、誰にともなしに。

*

いつしかに正月も過ぎて、
わが生活が
またもこの道にはまり來れり。

神様と議論して泣きし——
あの夢よ！
四日ばかりも前の朝なりし。

*

家にかへる時間となるを、
ただ一つの待つことにして、
今日も働けり。

いろいろの人の思はく
はかりかねて、
今日もおとなしく暮らしたるかな。

*

おれが若しこの新聞の主筆ならば、
やらむ—と思ひし
いろいろの事!

石狩の空知郡の
牧場のお嫁さんより送り來し
バタかな。

*

外套の襟に頤を埋め、
夜ふけに立ごまりて聞く。
よく似た聲かな。

Yといふ符牒、
古日記の處處にあり—
Yとはあの人^{ひと}の事^{こと}なりしかな。

*

百姓^{ひやくせう}の多くは酒^{さけ}をやめしといふ。
もつと困^{こま}らば、
何を^{なに}やめるらむ。

目^めさまして直^すぐの心^{こころ}よ！
年^{とし}よりの家^{いえ}出^での記^き事^じにも
涙^{なみだ}出^いでたり。

*

人^{ひと}ととも^{とも}に事^{こと}をはかるに
適^{てき}せざる、
わが性^{せい}格^{かく}を思^{おも}ふ寢^ね覺^{ざう}かな。

何となく、
案外に多き氣もせらる、
自分と同じこと思ふ人。

*

自分よりも年若き人に、
半日も氣焰を吐きて、
つかれし心！

珍らしく、今日は、
議會を罵りつつ涙出でたり。
うれしと思ふ。

*

ひと晩に咲かせてみむと、
梅の鉢を火に焙りしが、
咲かざりしかな。

あやまちて茶碗をこはし、
物をこはす氣持のよさを、
今朝も思へる。

*

猫の耳を引つぱりてみて、
にやと啼けば、
びつくりして喜ぶ子供の顔かな。

何故かうかとなさけなくなり、
弱い心を何度も叱り、
金かりに行く。

*

待てど待てど、
来る筈の人の来ぬ日なりき、
机の位置を此處に變へしは。

古新聞！

おやここに
おれの歌の事を
賞めて書いてあり、
二三行なれど。

*

引越しの朝の足もとに落ちてゐぬ、

女の寫眞！

忘れぬし寫眞！

その頃は氣もつかざりし
假名ちがひの多きことかな、
昔の戀文！

*

八年前の
今のわが妻の手紙の束！
何處に藏ひしかと氣にかかるかな。

眠られぬ癖のかなしさよ！
すこしでも
眠気がさせば、うろたへて寝る。

*

笑ふにも笑はれざりき——
長いこと捜したナイフの
手の中にあるしに。

この四五年、
空を仰ぐといふことが一度もなかりき。
かうもなるものか？

*

原稿紙にでなくては
字を書かぬものと、
かたく信ずる我が兒のあごけなさ！

どうかかかうか、今月も無事に暮らしたりと、
外に欲もなき
晦日の晩かな。

*

あの頃はよく嘘を言ひき。
平氣にてよく嘘を言ひき。
汗が出づるかな。

古手紙よ！

あの男とも、五年前は、
かほご親しく交はりしかな。

*

名は何と言ひけむ。
姓は鈴木なりき。
今はどうして何處にゐるらむ。

生れたといふ葉書みて、
ひとしきり、
顔をはれやかにしてゐたるかな。

*

そうれみる、
あの人も子をこしらへたと、
何か氣の済む心地にて寝る。

『石川はふびんな奴だ。』
ときにかう自分で言ひて、
かなしみてみる。

*

ドア推してひと足出れば、
病人の目にはてもなき
長廊下かな。

重い荷を下したやうな、
氣持なりき、
この寢臺の上に来ていねしとき。

*

そんならば生命が欲しくないのかと、
醫者に言はれて、
だまりし心！

眞夜中にふと目がさめて、
わけもなく泣きたくなりて、
蒲團をかぶれる。

*

話しかけて返事のなきに
よく見れば、
泣いてゐたりき、隣りの患者。

病室の窓にもたれて、
久しぶりに巡査を見たりと、
よろこべるかな。

*

晴れし日のかなしみの一つ！
病室の窓にもたれて
煙草を味ふ。

夜おそく何處やらの室の騒がしきは
人や死にたらむと、
息をひそむる。

*

脈をとる看護婦の手の、
あたたかき日あり、
つめたく堅き日もあり。

病院びやういんに入りて初めての夜よといふに、
すぐ寝ね入りしが、
物もの足たらぬかな。

*

何なにとなく自分じぶんをえらい人のやうに
思おもひてゐたりき。
子供こどもなりしかな。

ふくれたる腹はらを撫なでつつ、
病院びやういんの寢ね臺たいに、ひとり、
かなしみてあり。

*

目めさませば、からだ痛いたくて
動うごかれず。
泣なきたくなりて、夜よ明あくるを待まつ。

びつしよりと盗汗出てゐる
あけがたの
まだ覺めやらぬ重きかなしみ。

*

ぼんやりとした悲しみが、
夜となれば、
寢臺の上にとつと來て乗る。

病院の窓によりつつ、
いろいろの人の
元氣に歩くを眺む。

*

もうお前の心底をよく見届けたと、
夢に母來て
泣いてゆきしかな。

思ふこと盗みきかるる如くにて、
つと胸を引きぬ—
聴診器より。

*

看護婦の徹夜するまで、
わが病ひ、
ゐるくなれども、ひそかに願へる。

病院に来て、
妻や子をいつくしむ
まことの我にかへりけるかな。

*

もう嘘をいはじと思ひき—
それは今朝—
今また一つ嘘をいへるかな。

何となく、
自分を嘘のかたまりの如く思ひて、
目をばつぶれる。

*

今までのことを
みな嘘にしてみれど、
心すこしも慰まざりき。

軍人になると言ひ出して、
父母に
苦勞させたる昔の我かな。

*

うつとりとなりて、
劍をさげ、馬にのれる己が姿を
胸に描ける。

藤澤といふ代議士を
弟のごとく思ひて、
泣いてやりしかな。

*

何か一つ
大いなる悪事しておいて、
知らぬ顔してゐたき氣持かな。

ちつとして寝ていらつしやいと
子供にでもいふがごとくに
醫者のいふ日かな。

*

氷囊の下より
まなこ光らせて、
寝られぬ夜は人をにくめる。

春の雪みだれて降るを
熱のある目に
かなしくも眺め入りたる。

人間のその最大のかなしみが
これかど
ふつと目をばつぶれる。

廻診の醫者の遅さよ！
痛みある胸に手をおきて
かたく眼をとぶ。

醫者の顔色をちつと見し外に
何も見ざりき
胸の痛み募る日。

病みてあれば心も弱るらむ！
さまざまの
泣きたきことが胸にあつまる。

*

寝つつ読む本の重さに
つかれたる
手を休めては、物を思へり。

今日はなせか、

二度も、三度も、
金側の時計を一つ欲しと思へり。

*

いつか是非、出さんと思ふ本のこと、
表紙のことなど、
妻に話れる。

胸むねいたみ、
春はるの霰みぞれの降ふる日ひなり。
薬くすりに噎むせて、伏ふして眼めをとづ。

*

あたらしきサラダの色いろの
うれしさに、
箸はしとりあげて見みは見みつれども――

子こを吐しゃる、あはれ、この心こころよ。
熱あつ高たかき日ひの癖くせとのみ
妻つまよ、思おもふな。

*

運命えんめいの來きて乗のれるかど
うたがひぬ――
蒲團かぶとんの重おもき夜半よなかの寢覺ねざめめに。

たへがたき渴き覺ゆれど、
手をのべて
林檎こるだにもうき日かな。

*

氷嚢のとけて温めば、
おのづから目がさめ來り、
からだ痛める。

いま、夢に閑古鳥を聞けり。
閑古鳥を忘れざりしが
かなしくあるかな。

*

ふるさとを出でて五年、
病をえて、
かの閑古鳥を夢にきけるかな。

閑古鳥

澁民村の山莊をめぐる林の
あかつきなつかし。

*

ふるさとの寺の畔の

ひばの木

いただきに来て啼きし閑古鳥！

脈をとる手のふるひこそ

かなしけれ

醫者に叱られし若き看護婦！

*

いつとなく記憶に残りぬ

F といふ看護婦の手の

つめたさなども。

はづれまで一度ゆきたしと
思ひひるし
かの病院の長廊下かな。

*

起きてみて、
また直ぐ寝たくなる時の
力なき眼に愛でしチユリッブ！

堅く握るだけの力も無くなりし
やせし我が手の
いとほしさかな。

*

わが病の
その因るところ深く且つ遠きを思ふ。
目をとちて思ふ。

かなしくも、
病やまひいゆるを願ねがはざる心こころ我われに在あり。
何なんの心こころぞ。

*

新あたしきからだを欲ほしと思おもひけり、
手しゅ術じゆつの傷きずの
痕あとを撫なでつづ。

薬くすりのむことを忘わするるを、
それとなく、
たのしみに思おもふ長なが病やまひかな。

*

ポロオデンといふ露ろ西し亞あ名なが、
何なん故げともなく、
幾いく度も思おもひ出ださるる日ひなり。

いつとなく我にあゆみ寄り、
手を握り、
またいつとなく去りゆく人々！

*

友も妻もかなしと思ふらし—
病みても猶、
革命のこころ口に絶たねば。

やや遠きものに思ひし
テロリストの悲しき心も—
近づく日のあり。

*

かかる目に
すでに幾度會へることぞ—
成るがままに成れど今は思ふなり。

月に三十圓もあれば、田舎にては、
樂に暮せること——
ひよつと思へる。

*

今日もまた胸に痛みあり。
死ぬならば、
ふるさどに行きて死なむと思ふ。

いつしかに夏となれりけり。
やみあがりの目にこころよき
雨の明るさ！

*

病みて四月——

そのときどきに變りたる
くすりの味もなつかしきかな。

病みて四月

その間にも、猶、目に見えて、
わが子の脊丈のびしかなしみ。

*

すこやかに、

脊丈のびゆく子を見つつ、
われの日毎にさびしきは何ぞ。

まくら邊に子を坐らせて、
まじまじとその顔を見れば、
逃げてゆきしかな。

*

いつも子を

うるさきものに思ひゐし間に、
その子、五歳になれり。

その親にも、
親の親にも似るなかれ—
かく汝が父は思へるぞ、子よ。

*

かなしきは、

(われもしかりき)

叱れども、打てども泣かぬ兒の心なる。

「労働者」革命「などいふ言葉を

聞きおぼえたる
五歳の子かな。

*

時として、

あらん限りの聲を出し、
唱歌をうたふ子をほめてみる。

何思ひけむ—
玩具をすてておとなしく、
わが側に來て子の坐りたる。

*

お菓子貰ふ時も忘れて、
二階より、
町の往來を眺むる子かな。

新しきインクの匂ひ、
目に泌むもかなしや。
いつか庭の青めり。

*

ひとところ、疊を見つめてありし間の
その思ひを、
妻よ、語れといふか。

あの年のゆく春のころ、
眼をやみてかけし黒眼鏡――
こはしやしにけむ。

*

薬のむことを忘れて、
ひさしぶりに、
母に叱られしをうれしと思へる。

枕邊の障子あけさせて、
空を見る癖もつけるかな――
長き病に。

*

おとなしき家畜のごとき
心となる、
熱やや高き日のたよりなさ。

何か、かう、書いてみたくなりて、
ペンを取りぬ—
花活の花あたらしき朝。

*

放たれし女のごとく、
わが妻の振舞ふ日なり。
ダリヤを見入る。

あてもなき金などを待つ思ひかな。
寝つきつして、
今日も暮したり。

*

何もかもいやになりゆく
この氣持よ。
思ひ出しては煙草を吸ふなり。

或る市にゐし頃の事として、
友の語る
戀がたりに嘘の交るかなしさ。

*

ひさしぶりに、
ふと聲を出して笑ひてみぬ—
蠅の両手を揉むが可笑しさに。

胸いたむ日のかなしみも、
かをりよき煙草の如く、
棄てがたきかな。

*

何か一つ騒ぎを起してみたかりし、
先刻の我を
いとしと思へる。

五歳さいになる子こに、何故なともなく、
ソニヤソニヤといふ露西亞ルシア名なをつけて、
呼よびてはよろこぶ。

*

解とけがたき
不和わのあひだに身みを處して、
ひとりかなしく今日けも怒いかれり。

*

猫ねこを飼かはば、
その猫ねこがまた争あらそひの種たねとなるらむ、
かなしきわが家いへ。

俺おれひとり下宿屋しゆくやにやりてくれぬかと。
今日けふもあやふく、
いひ出いでしかな。

*

ある日ひふと、やまひを忘わすれ、
牛うしの啼なく真似まねをしてみぬ、
妻子つまこの留守るすに。

かなしきは我が父ちち!

今日けふも新聞しんぶんを讀よみあきて、
庭にはに小蟻こあひと遊あそべり。

*

ただ一人ひとりの
をこの子こなる我われはかく育そだてり。
父母ふぼもかなしかるらむ。

茶まで断ちて、
わが平復を祈りたまふ
母の今日また何か怒れる。

*

今日ひよつと近所の子等と遊びたくなり、
呼べと来らず。
こころむづかし。

やまひ癒えず、
死なす、

日毎にこころのみ険しくなれる七八月かな。

*

買ひおきし
薬つきたる朝に来し
友のなさけの爲替のかなしさ。

兒を叱れば、
泣いて寝入りぬ。
口すこしあけし寝顔にさはりてみるかな。

*

何がなしに
肺が小さくなれる如く思ひて起きぬ——
秋近き朝。

秋近し！

電燈の球のぬくもりの
さはれば指の皮膚に親しき。

*

ひる寝せし兒の枕邊に
人形を買ひ来てかざり、
ひとり楽しむ。

クリストを人なりといへば、
妹の眼がかなしくも、
われをあはれむ。

*

椽先にまくら出させて、
ひさしぶりに、
ゆふべの空にしたしめるかな。

庭のそこを白き犬ゆけり。
ふりむきて、
犬を飼はむと妻にはかれる。

對
話
と
感
想

一利己主義者と友人との對話

B おい、おれは今度また引越しをしたぜ。

A さうか。君は来るたんび引越しの披露をして行くね。

B それは僕には引越し位の外に何もわざわざ披露するやうな事件が無いからだ。

A 葉書でも済むよ。

B しかし今度のは葉書では済まん。

A ごうしたんだ。何日かの話の下宿の娘から縁談でも申込まれて逃げ出したのか。

B 莫迦なことを言へ。女の事なんか近頃もうちつとも僕の目につらなくなつた。女より食物だね。好きな物を食つてさへ居れば僕には不平はない。

A 殊勝な事を言ふ。それでは今度の下宿はうまい物を食はせるのか。

B 三度三度うまい物ばかり食はせる下宿が何處にあるもんか。

A 安下宿ばかりころがり歩いた癖に。

B 皮肉るない。今度のは下宿ぢやないんだよ。僕はもう下宿生活には飽き飽きしちやつた。

A よく自分に飽きないね。

B 自分にも飽きた。飽きたから今度の新生活を始めたんだ。室だけ借りて置いて、飯は三度とも外へ出て食ふことにしたんだよ。

A 君のやりさうなこつたね。

B さうかね。僕はまた君のやりさうなこつたと思つてゐた。

A 何故。

B 何故つてさうぢやないか。第一こんな自由な生活はないね。居處つて奴

は案外人間を束縛するもんだ。何處かへ出てゐても、飯時になれあ直ぐ家のことを考へる。あれだけでも僕みたいな者にや一種の重荷だよ。それよりは何處でも構はず腹の空いた時に飛び込んで、自分の好きな物を食つた方が可いちやないか。(間)何でも好きなものが食へるんだからなあ。初めの間は腹のへつて來るのが樂みで、一日に五回づつ食つてやつた。出掛けて行つて食つて來て、煙草でも喫んでるとまた直ぐ食ひたくなるんだ。

A 飯の事をさう言へや眠る場所だつてさうぢやないか。毎晩毎晩同じ夜具を着て寝るつてのも餘り有難いことぢやないね。

B それはさうさ。しかしそれは仕方がない。身體一つならどうでも可いが、机もあるし本もある。あんな荷物をどつさり持つて、毎日毎日引越して歩かなくちやならないとなつたら、それこそ苦痛ぢやないか。

A 飯のたんびに外に出なくちやならないといふのと同じだ。

B 飯を食ひに行くには荷物はない。身體だけで済むよ。食ひたいなあと思つた時、ひよいと立つて帽子を冠つて出掛けるだけだ。財布さへ忘れなげや可い。ひと足ひと足うまい物に近づいて行くつて氣持は實に可いね。

A ひと足ひと足新しい眠りに近づいて行く氣持はどうだね。ああ眠くなつたと思つた時、てくてく寢床を探しに出かけるんだ。昨夜は隣の室で女の泣くのを聞きながら眠つたつけが、今夜は何を聞いて眠るんだらうと思ひながら行くんだ。初めての宿屋ぢや此方の誰だかをちつとも知らない。知つた者の一人もゐない家の、行燈か何かついた奥まつた室に、やはらかな夜具の中に緩くり身體を延ばして安らかな眠りを待つてる氣持はどうだね。

B それあ可いさ。君もなかなか話せる。

A 可いだらう。毎晩毎晩さうして新しい寢床で新しい夢を結ぶんだ(間)本も机も棄てつちまふさ。何もいらぬ。本を讀んだつてどうもならんぢや

ないか。

B ますます話せる。しかしそれあ話だけだ。初めのうちはそれで可いかも知れないが、しまひには屹度おつくうになる。やつぱり何處かに落付いてしまふよ。

A 飯を食ひに出かけるのだつてさうだよ。見給へ、二日経つと君はまた何處かの下宿にころがり込むから。

B ふむ。おれは細君を持つまでは今の通りやるよ。屹度やつて見せるよ
A 細君を持つまでか。可哀相に。(問)しかし羨ましいね。君の今のやり方は、實はずつと前からのおれの理想だよ。もう三年からになる。

B さうだらう。おれはごうも初め思ひたつた時、君のやりさうなこつたと思つた。

A 今でもやりたいと思つてる。たつた一月でも可い。

B どうだ、おれん處へ来て一緒にやらないか。可いせ。そして飽きたら以前に歸るさ。

A しかし厭だね。

R 何故。おれと一緒に厭なら一人でやつても可いぢやないか。

A 一緒でも一緒になくても同じことだ。君は今それを始めたばかりで大いに満足してるね。僕もさうに違ひない。やつぱり初めのうちは日に五度も食事をするか知れない。しかし君はそのうちに飽きてしまつておつくうになるよ。さうしておれん處へ来てまた引越しの披露をするよ。その時おれは「とうとう飽きたね。」と君に言ふね。

B 何だい。もうその時の挨拶まで工夫してるのか。

A まあさ、「とうとう飽きたね。」と君に言ふね。それは君に言ふのだから可い。おれは其奴を自分には言ひたくない。

B 相不変厭な男だなあ、君は。

A 厭な男さ。おれもさう思つてる。

B 君は何日か——あれは去年かな——おれと一緒にへ行つて淫賣屋から逃げ出した時そんなことを言つた。

A さうだつたかね。

B 君は屹度早く死ぬ。もう少し氣を廣く持たなくちや可かんよ。一體君は餘りアンビシヤスだから可かん。何だつて眞の満足つてもものは世の中に有りやしない。従つて何だつて飽きる時が来るに定つてらあ。飽きたり、不満足になつたりする時を豫想して何にもせずにある位なら生れて來なかつた方が餘つ程可いや。生れた者は屹度死ぬんだから。

A 笑はせるない。

B 笑つてもゐないぢやないか。

A 可笑しくもない。

B 笑ふさ。可笑しくなくつたつて些たあ笑はなくちや可かん。はは。(間)しかし何だね。君は自分で飽きつばい男だと言つてるが案外さうでもないやうだね。

A 何故。

B 相不変歌を作つてるぢやないか。

A 歌か。

B 止めたかと思ふとまた作る。執念深いところが有るよ。やつぱり君は一生歌を作るだらうな。

A ごうだか。

B 歌も可いね。こなひだ友人どこへ行つたら、やつぱり歌を作るとか讀むどかいふ姉さんがゐてね。君の事を話してやつたら、「あの歌人はあなたの

お友達なんですか。」つて喫驚してゐたよ。おれはそんなに俗人に見えるのかな。

A 「歌人」は可かつたね。

B 首をすくめることはないぢやないか。おれも實は最初變だと思つたよ
A は歌人だ！ 何んだか變なものな。しかし歌を作つてる以上はやつぱり歌人にや違ひないよ。おれもこれから一つ君を歌人扱ひにしてやらうと思つてるんだ。

A 御馳走でもしてくれるのか。

B 莫迦なことを言へ。一體歌人にしろ小説家にしろ、すべて文學者といはれる階級に屬する人間は無責任なものだ。何を書いても書いたことに責任を負はない。待てよ、これは、何日か君から聞いた議論だつたね。

A どうだか。

B どうだかつて、たしかに言つたよ。文藝上の作物は巧いにして拙いにしろ、それがそれだけで完了してると云ふ點に於て、人生の交渉は歴史上の事柄と同じく間接だ、とか何とか。(間)それはまあどうでも可いが、兎に角おれは今後無責任を君の特權として認めて置く。特待生だよ。

A 許してくれ。おれは何よりもその特待生が嫌ひなんだ。何日だつて北海道へ行く時青森から船に乗つたら、船の事務長が知つてる奴だつたものだから、三等の切符を持つてるおれを無理矢理に一等室に入れたんだ。室だけならまだ可いが、食事の時間になつたらボーイを寄こしてどうどう食堂まで引張り出された。あんなに不愉快な飯を食つたことはない。

B それは三等の切符を持つてゐた所以だ。一等の切符さへ有れば當り前ぢやないか。

A 莫迦を言へ。人間は皆赤切符だ。

B 人間は皆赤切符！ やつぱり話せるな。おれが飯屋へ飛び込んで空樽に腰掛けるのもそれだ。

A 何だい、うまい物うまい物つて言ふから何を食ふのかと思つたら、一膳飯屋へ行くのか。

B 上は静養軒の洋食から下は一膳飯、牛飯、大道の焼鳥に至るさ。飯屋にだつてうまい物は有るぜ。先刻来る時はとろろ飯を食つて来た。

A 朝には何を食ふ。

B 近所にミルクホールが有るから其處へ行く。君の歌も其處で讀んだんだ。何でも雑誌をとつてる家だからね。(間)さうさう、君は何日か短歌が滅びるとおれに言つたことがあるね。此頃その短歌滅亡論といふ奴が流行つて来たぢやないか。

A 流行るかね。おれの讀んだのは尾上柴舟といふ人の書いたのだけだ。

B さうさ。おれの讀んだのもそれだ。然し一人が言ひ出す時分にや十人か五人は同じ事を考へてるもんだよ。

A あれは尾上といふ人の歌そのものが行きづまつて来たといふ事實に立派な裏書をしたものだ。

B 何を言ふ。そんなら君があゝの議論を唱へた時は、君の歌が行きづまつた時だつたのか。

A さうさ。歌ばかりぢやない、何もかも行きづまつた時だつた。

B しかしあれには色色理屈が書てあつた。

A 理屈は何にでも着くさ。ただ世の中のこととは一つだつて理屈によつて推移してゐないだけだ。たとへば、近頃の歌は何首或は何十首を、一首一首引き抜いて見ないで全體として見るやうな傾向になつて来た。そんなら何故それらを初めから一つとして現さないか。一一分解して現す必要が何處にあ

るか、とあれに書いてあつたね。一應尤もに聞えるよ。しかしあの理窟に服従すると、人間は皆死ぬ間際まで待たなければ何も書けなくなるよ。歌は——文學は作家の個人性の表現だといふことを狭く解釋してゐるんだからね。假に今夜なら今夜のおれの頭の調子を歌ふにしてもだね。なるほごひと晩のことだから一つに纏めて現した方が都合は可いかも知れないが、一時間は六十分で一分は六十秒だよ。連続はしてゐるが初めから全體になつてゐるのではない。きれぎれに頭に浮んで來る感じを後から後からときれぎれに歌つたつて何も差支へがないぢやないか。一つに纏める必要が何處にあると言ひたくなるね。

B 君はさうすつと歌は永久に滅びないと云ふのか。

A おれは永久といふ言葉は嫌ひだ。

B 永久でなくても可い。兎に角まだまだ歌は生ずると思ふのか。

A 長生はする。昔から人生五十といふが、それでも八十位まで生きる人は澤山ある。それと同じ程度の長生はする。しかし死ぬ。

B 何日になつたら八十になるだらう。

A 日本の國語が統一される時さ。

B もう大分統一されかかつてゐるせ。小説はみんな時代語になつた。小學校の教科書と詩も半分はなつて來た。新聞にだつて三分の一は時代語で書いてある。先を越してローマ字を使ふ人さへある。

A それだけ混亂してゐたら澤山ぢやないか。

B ふむ。さうすつとまだまだだか。

A まだまだ。日本は今三分の一まで來たところだよ。何もかも三分の一だ。所謂古い言葉と今の口語と比べて見ても解る。正確に違つて來たのは、「なり」なりけり」と「だ」である」だけだ。それもまだまだ文章の上では併用

されてゐる。音文字が採用されて、それで現すに不便な言葉がみんな淘汰される時が来なくちや歌は死なない。

B 氣長い事を言ふなあ。君は元來性急な男だつたがなあ。

A あまり性急だつたお蔭で氣長になつたのだ。

B 悟つたね。

A 絶望したのだ。

B しかし兎に角今の我我の言葉が五とか七とかいふ調子を失つてるのは事實ぢやないか。

B 「いかにさびしき夜なるぞや。」なんてさびしい晩だらう。「ごつちも七五調ぢやないか。

B それは極めて稀な例だ。

A 昔の人は五七調や七五調でばかり物を言つてゐたと思ふのか。莫迦。

B これでも賢いせ。

A とはいふものの、五と七がだんだん亂れて來てるのは事實だね。五が六に延び、七が八に延びてゐる。そんならそれで歌にも字あまりを使へば濟むことだ。自分が今迄勝手に古い言葉を使つて來てゐて、今になつて不便だもないぢやないか。成るべく現代の言葉に近い言葉を使つて、それで三十一字に纏りかねたら字あまりにするさ。それで出來なけれあ言葉や形が古いんでなくつて頭が古いんだ。

B それもさうだね。

A のみならず、五も七も更に二とか三とか四とかにまだまだ分解するこゝとが出來る。歌の調子はまだまだ複雑になり得る餘地がある。昔は何日の間にか五七五、七七と二行に書くことになつてゐたのを、明治になつてから一本に書くことになつてゐた。今度はあれを壞すんだね。歌には一首一首各異

つた調子がある筈だから、一首一首別なわけ方で何行かに書くことにするんだね。

B さうすると歌の前途はなかなか多望なものになるなあ。

A 人は歌の形は小さくて不便だといふが、それは小さいから却つて便利だと思つてゐる。さうぢやないか。人は誰でも、その時が過ぎてしまへば間もなく忘れるやうな、乃至は長く忘れずにゐるにしても、それを思ひ出すには餘り接穂がなくてさうどう一生思ひ出さずにしまふといふやうな、内から外からの數限りなき感じを、後から後から常に經驗してゐる。多くの人はそれを輕蔑してゐる。輕蔑しないまでも殆ど無關心にエスケープしてゐる。しかしいのちを愛する者はそれを輕蔑することが出来ない。

A 待てよ。ああさうか一分は六十秒なりの論法だね。

B さうさ。一生に二度とは歸つて來ないいのちの一秒だ。おれはその一

秒がいとしい。たゞ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。實際便利だからね。歌といふ詩形を持つてるといふことは、我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。(間)おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。(間)しかしその歌も滅亡する。理窟からでなく内部から滅亡する。しかしそれはまだまだ、早く滅亡すれば可いと思ふがまだまだ。

(間)日本はまだ三分の一だ。

B いのちを愛するつてのは可いね。君は君のいのちを愛して歌を作り、おれはおれのいのちを愛してうまい物を食つてあるく。似たね。

A (間)おれはしかし、本當のところはおれに歌なんか作らせたくない。

B ごういふ意味だ。君はやつぱり歌人だよ。歌人だつて可いぢやないかしつかりやるさ。

A おれはおれに歌を作らせるよりも、もつと深くおれを愛してゐる。
B 解らんない。

A 解らんない。(間)しかしこれは言葉でいふと極くつまらんことになる。

B 歌のやうな小さいものに全生命を託することが出来ないといふのか。

A おれは初めから歌に全生命を託さうと思つたことなんかない。(間)何にだつて全生命を託することが出来るもんか。(間)おれはおれを愛してはゐるが、其のおれ自身だつてあまり信用してはゐない。

B (やや突然に)おい、飯食ひに行かんか。(間、獨語するやうに。)おれも腹のへつた時はそんな氣持のすることがあるなあ。

歌のいろく

(一)

○日毎に集つて来る投書の歌を讀んでゐて、ひよいと妙な事を考へさせられることがある。——此處に作者その人に差障りを及ぼさない範圍に於て一二の例を擧げて見るならば、此頃になつて漸く手を着けた十月中到着の分の中に、神田の某君といふ人の半紙二つ折へ横に二十首の歌を書いて、『我目下の境遇』と題を付けたのがあつた。

○讀んでゐて私は不思議に思つた。それは歌の上手な爲ではない。歌は字と共に寧ろ拙かつた。又その歌つてある事の特に珍らしい爲でもなかつた。私を不思議に思はせたのは、脱字の多い事である。誤字や假名遣ひは何百といふ投書家の中に随分やる人がある。寧ろ驚く位ある。然し恁麼に脱字の多い

のは滅多にない。要らぬ事とは思ひながら數へてみると、二十首の中に七箇所脱字があつた。三首に一箇所の割合である。

○歌つてある歌には、母が病氣になつて秋風が吹いて來たといふのがあつた。僻心を起すのは悪い／＼と思ひながら何時しか夫が癖になつたといふのがあつた。十八の歳から生活の苦しみを知つたといふのがあつた。安らかに眠つてゐる母の寝顔を見れば涙が流れるといふのがあつた。弟の無邪氣なのを見て傷んでゐる歌もあつた。金といふものに數々の怨みを言つてゐるのもあつた。終日の仕事の疲れといふことを歌つたのもあつた。

○某君は一體に粗忽しい人なのだらうか？小學校にゐた頃から脱字をしたり計數を間違つたり、忘れ物をする癖のあつた人なのだらうか？——恁麼事を問うてみるからが既に勝手な、作者に對して失禮な推量で、隨つてその答へも亦勝手な推量に過ぎないのだが、私には何うもさうは思へなかつた。進む

べき路を進みかねて境遇の犠牲となつた人の、その心に消しがたき不平が有れば有る程、元氣も顔色も人先に衰へて、幸運な人がこれから初めて世の中に打つて出ようといふ歳頃に、早く既に醫しがたき神經衰弱に陥つてゐる例は、私の知つてゐる範圍にも二人や三人ではない。私は「十八の歳から生活の苦しみを知つた人」と「脱字を多くする人」とを別々に離して考へることは出来なかつた。

○某君のこの投書は、多分何か急がしい事のある日か、心の落付かぬ程嬉しい事でもある日に書いたので、斯う脱字が多かつたのだらう。さうだらうと私は思ふ。然し若し此處に私の勝手に想像したやうな人があつて、某君の歌つたやうな事を誰かの前に訴へたとしたならば、その人は果して何と答へるだらうか。

○私は色々の場合、色々の人のそれに對する答へを想像して見た。それは皆

如何にも尤もな事ばかりであつた。然しそれらの叱咤それらの激勵、それらの同情は果して何れだけその不幸なる青年の境遇を變へてくれるだらうか。のみならず私は又次のやうな事も考へなければならなかつた。二十首の歌に七箇所の脱字をする程頭の悪くなつてゐる人ならば、その平生の仕事にも「脱字」が有るに違ひない。その處世の術にも「脱字」があるに違ひない。——私の心はいつか又、今の諸々の美しい制度、美しい道徳をその儘長く我々の子孫に傳へる爲には、何れだけの夥しい犠牲を作らねばならぬかといふ事に移つて行つた。さうして泌々した心持になつて次の投書の封を切つた。

(二)

○大分前の事である。茨城だつたか千葉だつたか乃至は又群馬の方だつたか何しろ東京から餘り遠くない縣の何とか郡何とか村小學校内某といふ人から歌が來た。何日か經つて其の歌の中の何首かが新聞に載つた。すると間もな

く私は同じ人からの長い手紙を添へた二度目の投書を受け取つた。

○其の手紙は候文と普通文とを捏ね交ぜたやうな文體で先づ自分が「憐れなる片田舎の小學教師」であるといふ事から書き起してあつた。さうして自分が自分の職務に對して兎角興味を有ら得ない事、誰一人趣味を解する者なき片田舎の味氣ない事、さうしてゐる間に豫々愛讀してゐる朝日新聞に歌壇の設けられたので空谷の聲音と思つたといふ事、近頃は新聞が着くと先づ第一に歌壇を見るときいふ事、就いては今後自分も全力を擧げて歌を研究する積だから宜しく頼む。今日から毎日必ず一通づゝ投書するといふ事が書いてあつた。

○此の手紙が宛名人たる私の心に惹起した結果は、蓋し某君の夢にも想はなかつた所であらうと思ふ。何故なれば、私はこれを讀んでしまつた時、私の心に明かに一種の反感の起つてゐる事を發見したからである。詩や歌や乃

至は其の外の文學にたづさはる事を、人間の他の諸々の活動よりも何か格段に貴い事のやうに思ふ迷信——それは何時如何なる人の口から出るにしても私の心に或反感を呼び起さずに濟んだことはない。歌を作ることを何か偉い事でもするやうに思つてる、莫迦な奴だ。」私はさう思つた。さうして又成程自ら言ふ如く憐れなる小學校師に違ひないと思つた。手紙には假名違ひも文法の違ひもあつた。

○然しその反感も直ぐと引込まねばならなかつた。「羨ましい人だ。」といふやうな感じが軽く横合から流れて來た爲めである。此の人は自分で自分を「憐れなる」と呼んではゐるが、如何に憐れで、如何にして憐れであるかに就いて眞面目に考へたことのない人、寧ろさういふ考へ方をしない質の人であることは、自分が不満足なる境遇に在りながら全力を擧げて歌を研究しようなどと言つてゐる事、しかも其歌の極平凡な叙事叙景の歌に過ぎない事、さうし

て他の營々として刻苦してゐる村人を趣味を解せぬ者と嘲つて僅に喜んでゐるらしい事などに依て解つた。己の爲る事、言ふ事、考へる事に對して、それを爲ながら、言ひながら、考へながら常に一々反省せずにはゐられぬ心、何事にまれ正面に其の問題に立向つて底の底まで究めようとせずにはゐられぬ心、日毎々々に自分自身からも世の中からも色々の不合理と矛盾とを發見して、さうして其の發見によつて却て益自分自身の生活に不合理と矛盾とを深くして行く心——さういふ心を持たぬ人に對する羨みの感は私のよく經驗する所のものであつた。

○私はとある田舎の小學校の宿直室にごろ／＼してゐる一人の年若き准訓導を想像して見た。その人は眞に人を怒らせるやうな悪口を一つも胸に蓄へてゐない人である。漫然として教科書にある丈の字句を生徒に教へ、漫然として自分の境遇の憐れな事を是認し、漫然として今後大に歌を作らうと思つて

る人である。未だ嘗て自分の心内乃至身邊に起る事物に對して、その根ざす處如何に深く、その及ぼす所如何に遠きかを考へて見たことのない人である。日毎に新聞を讀みながらも、我々の心を後から／＼と急がせて、日毎に新しく展開して來る時代の真相に對して何の切實な興味をも有つてゐない人である。私はこの人の一生に快よく口を開いて笑ふ機會が、私のそれよりも吃度多いだらうと思つた。

○翌日出社した時は私の頭にもう某君の事は無かつた。さうして前の日と同じ色の封筒に同じ名を書いた一封を他の投書の間に見付けた時、私はこの人が本當に毎日投書する積なのかと心持眼を大きくして見た。其翌日も來た。其又翌日も來た。或時は投函の時間が遅れたかして一日置いての次の日に二通一緒に來たこともあつた。「また來た。」私は何時もさう思つた。意地悪い事ではあるが、私はこの人がこの下らない努力に何時まで飽きずにゐられるか

に興味を有つて、それとはなしに毎日待つてゐた。

○それが確七日か八日の間續いた。或日私は、「とう／＼飽きたな。」と思つた。その次の日も來なかつた。さうして其後既に二箇月、私は再び某君の墨の薄い肩上りの字を見る機會を得ない。來ただけの歌は随分夥しい數に上つたが、ただ所謂歌になりさうなお物を漫然と三十一字の形に表しただけで、新聞に載せるほどのものは殆どなかつた。

○私はこの事を書いて來て、其後某君は何うしてゐるだらうと思つた。矢張新聞が着けばたゞ文藝欄や歌壇や小説許りに興味を有つて讀んでゐるだらうか。漫然と歌を作り出して漫然と罷めてしまつた如く、更に又漫然と何事かを始めてゐるだらうか。私は思ふ。若し某君にして唯一つの事、例へば自分で自分を憐れだといつた事に就いては、その如何に又如何にして然るかを正面に立向つて考へて、さうして其處に或動かすべからざる隠れたる事實を

承認する時、其某君の歌は自からにして生氣ある人間の歌になるであらうと。

(三)

○うつかりしながら家の前まで歩いて来た時、出し抜けに飼ひ犬に飛着かれ、
「あゝ、喫驚した。こん畜生！」と思はず知らず口に出す——といふやうな例はよく有ることだ。下らない駄洒落を言ふやうだが、人は喫驚すると悪口を吐きたるがものに見える。「こん畜生」と言はなくとも、白なら白、ボチならボチで可いではないか——若し必ず何とか言はなければならぬのならば。

○土岐哀果君が十一月の「創作」に発表した三十何首の歌は、この人がこれまで人の褒貶を度外どわいに置いて一人で開拓かひたくして来た新しい畑に、漸く樂い秋あきの近づいて来てゐることを思はせるものであつた。その中に、

焼あとの煉瓦れんがの上に

Syöbenをすればしみじみ

秋の氣がする

といふ一首しゅがあつた。好い歌だと私は思つた。(小便といふ言葉だけを態々わざわざ羅馬字で書いたのは、作者の意味では多分この言葉を在來の漢字で書いた時に伴つて来る悪い連想を拒む爲であらうが、私はそんな事をする必要はあるまいと思ふ。)

○さうすると今月になつてから、私は友人の一人から、或雑誌が特にこの歌を引いて土岐君の歌風を罵ののしつてゐるといふ事を聞いた。私は意外に思つた勿論この歌が同じ作者の歌の中で最も優れた歌といふのではないが、然し何度讀み返しても悪い歌にはならない。評者は何故この鋭い實感を承認するこゝとが出来なかつたであらうか。さう考へた時、私は前に言つた「こん畜生」の場合を思ひ合せぬ譯に行かなかつた。評者は吃度歌きつどといふものに就いて或

狭い既成概念を有つてゐる人に違ひない。自ら新しい歌の鑑賞家を以て任じてゐる乍ら、何時となく歌は斯ういふもの、斯くあるべきものといふ保守的な概念を形成つてさうしてそれに捉はれてゐる人に違ひない。其處へ生垣の隙間から飼犬の飛び出したやうに、小便といふ言葉が不意に飛び出して来て、その保守的な、苟安的な既成概念の袖にむづと噛み着いたのだ。然し飼犬が主人の歸りを喜んで飛び着くに何の不思議もない如く、我々の平生使つてゐる言葉が我々の歌に入つて来たとして何も喫驚するには當らないではないか。

○私の「やとばかり桂首相に手とられし夢みて覺めぬ秋の夜の二時」といふ歌も或雑誌で土岐君の小便の歌と同じ運命に會つた。尤もこの歌は、同じく實感の基礎を有しながら桂首相を夢に見るといふ極稀なる事實を内容に取り入れてあるだけに、言ひ換へれば萬人の同感を引くべく餘りに限定された内容を歌つてあるだけに、小便の歌ほど歌としての存在の權利を有つてゐない事は自分でも知つてゐる。

○故獨歩は嘗てその著名なる小説の一つに「驚きたい」と云ふ事を書いてゐた。その意味に於ては私は今でも驚きたくないことはない。然しそれと全く別な意味に於て、私は今「驚きたくない」と思ふ。何事にも驚かずに、眼を大きくして正面にその問題に立向ひたいと思ふ。それは小便と桂首相に就いてのみではない、又歌の事に就いてのみではない。我々日本人は特殊なる歴史を過去に有してゐるだけに、今正に殆どすべての新しい出來事に對して驚かねばならぬ境遇に在る。さうして驚いてゐる。然し日に百回「こん畜生」を連呼したとて、時計の針は一秒でも止まつてくれるだらうか。

○歴史を尊重するは好い。然しその尊重を逆に將來に向つてまで維持しようとして一切の「驚くべき事」に手を以て蓋をする時、其保守的な概念を嚴密に究明して来たならば、日本が嘗て議會を開いた事から先づ國體に牴觸する

譯になりはしないだらうか。我々の歌の形式は萬葉以前から在つたものである。然し我々の今日の歌は何處までも我々の今日の歌である。我々の明日の歌も矢つ張り何處までも我々の明日の歌でなくてはならぬ。

(四)

○机の上に片肘をついて煙草を吹かしながら、私は書き物に疲れた眼を置時計の針に遊ばせてゐた。さうしてこんな事を考へてゐた。——凡そすべての事は、それが我々にとつて不便を感じさせるやうになつて來た時、我々はその不便な點に對して遠慮なく改造を試みるが可い。またさう爲るのが本當だ。我々は他の爲に生きてゐるのではない、我々は自身の爲に生きてゐるのだ。

○たとへば歌にしてもさうである。我々は既に一首の歌を一行に書き下すことに或不便、或不自然を感じて來た。其處でこれは歌それだけの調子に依つて或歌は二行に或歌は三行に書くことにすれば可い。よしそれが歌の調子その

ものを破ると言はれるにしてからが、その在來の調子それ自身が我々の感情にしつくりそぐはなくなつて來たのであれば、何も遠慮をする必要がないのだ。三十一文字といふ制限が不便な場合にはごし／＼字あまりもやるべきである。又歌ふべき内容にしても、これは歌らしくないとか歌にならないとかいふ勝手な拘束を罷めてしまつて、何に限らず歌ひたいと思つた事は自由に歌へば可い。かうしてさへ行けば、忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じを愛惜する心が人間にある限り、歌といふものは滅びない。假に現在の三十一文字が四十一文字になり、五十一文字になるにしても、兎に角歌といふものは滅びない。さうして我々はそれに依つて、その刹那々々の生命を愛惜する心を満足させることが出来る。

○こんな事を考へて、恰度秒針が一回轉する程の間、私は凝然としてゐた。さうして自分の心が次第々々に暗くなつて行くことを感じた。——私の不便

を感じてゐるのは歌を一行に書き下す事ばかりではないのである。しかも私自身が現在に於て意のままに改め得るもの、改め得べきものは、僅にこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置と、それから歌ぐらゐなものである。謂はゞ何うでも可いやうな事ばかりである。さうして其他の眞に私に不便を感じさせ苦痛を感じさせるいろ／＼の事に對しては、一指をも加へることが出來ないではないか。否、それに忍従し、それに屈服して、慥まじき二重の生活が続けて行く外に此の世に生きる方法を有たないではないか。自分でも色々自分に辯解しては見るもの、私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度資本制度、智識賣買制度の犠牲である。

○目を移して、死んだもの、やうに疊の上に投げ出されてある人形を見た。歌は私の悲しい玩具である。

土 岐 哀 果

石川は遂に死んだ。それは明治四十五年四月十三日の午前九時三十分であつた。その四五日前のことである。金がもう無い、歌集を出すやうにしてくれ、そのことであつた。で、すぐさま東雲堂へ行つて、やつと話がましまつた。うけまつた金を懐にして電車に乗つてゐた時の心もちば、今だに忘れられない。一生忘れられないだらうと思ふ。

石川は非常によろこんだ。氷嚢の下から、ごんよりした目を光らせて、いくたびもうなづいた。

しばらくして、「それで、原稿はすぐ渡さなくてもいいのだらうな、訂さなくちやならぬいところもある、癒つたられが整理する」と言つた。その聲は、かすれて聞きざりにくかつた。

「それでもいいが、東雲堂へはすぐ渡すといつておいた、」と言ふと、「さうか」と、しばらく目を閉ぢて、無言であつた。

やがて、枕もこにゐた夫人の節子さんに、「おい、そのノートをさつてくれ、——その陰氣な、」とすし上を向いた。ひどく瘦せたなアミ、その時僕はれもつた。

「どのくらゐある？」と石川は節子さんに訊いた。一頁に四首づつで五十頁あるから四五の二百首ばかりだと答へると、「どれ」と、石川は、その、灰色のラシヤ帯の表帯をつけた中版のノートをうけとつて、まごころごころ抜いたが、「さうか。では、萬事よろしくたのむ。」と、言つて、それを僕に渡した。

それから石川は、全快したら、これこれのことをすると、苦しさに、しかし、笑ひながら語つた。

かへりがけに、石川は、襖を閉めかけた僕を「おい」と呼びよめた。立つたまゝ「何だい」と訊くと、「おい、これからも、たのむぞ、」と言つた。

これが僕の石川に物をいはれた最後であつた。

石川は死ぬ、さうは思つてゐたが、いよいよ死んで、あその事を僕がするさなるさ、實に變な氣がする。

石川について、言ふさなるさ、あれも言はなければならぬ。しかし、まだ、あまり言ひたくない。もつと、じつとだまつて、かんがへてゐたい。實際、石川の、二十八年の一生をかんがへるには、僕の今までがあまりに貧弱に思はれてならないのである。しかし、この歌集のこゝについては、もう少し書いておく必要がある。

これに収めたのは、大てい雑誌や新聞に掲げたものである。しかし、こゝにはすべて「陰

氣」なノートに依つた。順序、句讀、行の立て方、字を下げるまゝ、すべてノートのまゝである。たゞ最初の二首は、その後帯片に書いてあつたのを発見したから、それを入れたのである。第九十頁に一首空けてあるが、ノートに、あすこゝで頁が更めてあるから、それもそのまゝにした。生きてゐたら、訂したいまゝもあるだらうが、今では、何とも仕やうがない。

それから、「一利己主義者と友人との對話」は創作の第九號(四十三年十一月發行)に掲げたもの、「歌のいろ／＼」は朝日歌壇を選んでゐた時、(四十三年十二月前後)東京朝日新聞に連載したものである。この二つを歌集の後へ附けるこゝは、石川も承諾したこゝである。

表題は、ノートの第一頁に「一握の砂以後明治四十三年十一月末より」と書いてあるから、それをそのまま表題にしたいと思つたが、それだまゝ「一握の砂」とまぎらばしくして困るさ東雲堂でいふから、これは止むをはず、感想の最後に「歌は私の悲しい玩具である」とあるのをとつてそれを表題にした。これは節子さんにも傳へておいた。あの時、何とするか訊いておけばよかつたのであるが、あの態姿を前にして、全快後の計畫を話されてはもう、そんなこゝを訊けなかつた。(四十五年六月九日)

明治四十五年六月十五日印刷
明治四十五年六月二十日發行
大正元年九月八日再版發行

(定價金五十錢)

(具玩きし悲集歌)
著 作 權 所 有

著 者 石 川 一

東 京 市 京 橋 區 南 傳 馬 町 三 丁 目 十 番 地

發 行 者 西 村 寅 次 郎

東 京 市 京 橋 區 新 榮 町 二 丁 目 二 十 一 番 地

印 刷 者 佐 藤 保 太 郎

發 行 所

東 京 市 京 橋 區
南 傳 馬 町 三 丁 目

東 雲 堂 書 店

電 話 東 京 橋 一 六 三 九
振 替 東 京 五 六 一 四

刷印所刷印堂祥文藤佐



書版出堂弊るな細詳
にきがは復往は録目
す呈贈第次越申御て

同 じ 著 者 の 著 書

藪野掠十氏序・定價金六十錢
名取春仙氏畫・送費金六錢

歌 集 一 握 の 砂

著者の第一の歌集にして、章を分つこゝ五、「我を愛する歌」「煙」「秋風
のこころよきに」「忘れがたき人々」「手套を脱ぐ時」とし、五百五十一
首の歌を収む。すべて追憶と哀傷と諷諭と、自嘲となり、著者の半面の
儚はまた名残りなく本集に依つて窺ふを得。

東 雲 堂 書 店 出 版

歌 集

黃 昏 に

土 岐 哀 果 著

* 指をもて遠く迎れば、水いろの
ヴォルガの河の
なつかしきかな。

* おほきなる犬を飼はんさおもひけり、
落葉の林を、
ひこり歩きつ。

* ものを思ひつつ、街路を歩めば、
行人の顔の、さもしさよ
べつと睡する。

四 六 判 美 本 天 金 二 百 頁
定 價 五 十 錢 送 費 六 錢

東雲堂書店發行圖書

歌集	詩集	詩集	詩集	論集	詩集	詩集	歌集	歌集	歌集	歌集	歌集	戲曲集	戲曲集	詩集	詩集	歌集
桐	思	邪	午	和	別	收	一	悲	霧	路	演	夜	黃	哲	評	評
の	ひ	宗	後	泉	屋	染	物	店	時	門	出	花	花	花	花	花
北原白	北原白	北原白	吉原白	木下	若山	前田	石川	石川	河井	川路	小川	森山	土岐	石川	石川	石川
秋	秋	秋	勇	郎	水	暮	木	木	茗	虹	薰	村	果	郎	郎	郎
定價金八十五錢	定價金九十錢	定價金八十五錢	定價金壹圓	定價金壹圓	定價金七十七錢	定價金七十錢	定價金六十錢	定價金五十錢	定價金五十五錢	定價金五十錢	定價金八十錢	定價金六十錢	定價金五十錢	定價金八十錢	定價金八十錢	定價金八十錢
送費金六錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金八錢	送費金八錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金八錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金八錢	送費金八錢	送費金八錢

